

中国南朝の阿弥陀浄土図の景観と皇帝の苑

三宮 千佳（早稲田大学）

中国では初唐になると、浄土教の隆盛にともない阿弥陀浄土図がさかんに描かれるようになる。本発表では、こうした阿弥陀浄土図の景観を、画家は何を参考にして描いたかについて検討したい。

阿弥陀浄土図の景観に関する先行研究では、従来、敦煌莫高窟の初唐の阿弥陀浄土変相図が取り上げられてきた。しかし敦煌よりもさかのぼる南朝の作例として、成都万仏寺址出土の浅浮彫による阿弥陀浄土図があり、いまだその景観については論じられていないため、本発表で検討していきたい。

その阿弥陀浄土図は、成都万仏寺址出土の二菩薩立像（碑像）の背面にあり、法華経普門品変相図の上部に浅浮彫されたものである。画面最下部の蓮池には大きな橋がかかり、すぐ上の蓮池に囲まれた中島は、透視図の如く、手前から奥の本尊と聖衆へと収束するように描かれている。その中島にはハの字型に樹木が並び、樹下には敷物の上に二十余名の聖衆が居る。また画面左右端の中島には楼閣があり、本尊の背後は山岳景となっている。発表中では、この阿弥陀浄土図の構図をみていきたい。それによると本尊と聖衆の像高に合わせて、蓮池、建物、樹木などの景物が現実的な大きさと描かれており、やや稚拙だが透視図法ともいえるべき表現を用いた、風景画のような浄土図であることに気がつく。つまり画家は、阿弥陀浄土をあたかも現実世界の景観として描き出しているのである。

そこで浄土と現実の景観の関連性に着目して経典を見ていくと、『広弘明集』（唐道宣撰）所収の東晋・支遁の「阿弥陀仏像讚並序」には、阿弥陀浄土の景観について「（前略）館宇宮殿は悉く七寶を以ってし、皆自然に懸かり、芝制人の匠に非ず。苑圃池沼は蔚として奇策あり。飛沈は淵敷に天逸し、羣獸に逝寓して率真たり（後略）」と記されている。七宝で造られた館宇宮殿のまわりに広がる苑圃池沼は、草木が盛んに繁って奇策があり、魚や鳥は池や草木が生い茂るところを奔り、群獸に身を寄せても怖がらずありのままにしているという。この「苑圃池沼」の「苑」は、皇帝の庭園施設を表わす語句である。この阿弥陀浄土は、建物のほか池や草木があり、さらに魚や禽獸のいる景観として表現されているが、それはまさに皇帝の苑そのものである。つまり支遁は、見たこともない阿弥陀浄土の景観を、この世の最高権力者である皇帝の苑になぞらえて記したのである。

そのほか経典には、浄土の景観を「苑」を用いて表わす例が多数ある。おそらく古代の僧侶は、原典において浄土に関する箇所を解釈し漢訳する際には、この世の最高権力者の苑を参考に浄土を理解したのであろう。そして浄土の景観＝苑という認識が受け継がれ、浄土図制作においても、画家はその景観を描くとき、皇帝の苑をモデルにして描いたと考えられる。